



Title: Factors influencing post discharge activities of daily living in patients receiving rehabilitation in acute care hospital (急性期病院におけるリハビリテーション実施患者の退院後の日常生活動作に影響を及ぼす要因)

Authors: Hirotomo Shibahashi, Yuya Takakubo, Miyuki Murakawa, Michiaki Takagi, Masayasu Murakami (柴橋広智(東京工科大学作業療法学専攻 助教)、高窪祐弥(山形大学医学部整形外科学講座 准教授)、村川美幸(山形大学医学部附属病院 作業療法士)、高木理彰(山形大学医学部整形外科学講座 教授)、村上正泰(山形大学大学院医学系研究科医療政策学講座 教授))

Journal: scientific reports

掲載年月: 2025 年 9 月

研究概要: 本研究は、急性期病院でリハビリテーションを受けた患者の退院後の日常生活動作 (ADL) および手段的日常生活動作 (IADL) に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とした後ろ向き観察研究です。309 例を対象に、入院中の ADL 指標 (Barthel Index) と新たに開発した ADL 評価尺度、退院後 1.5~2 年後の IADL (Frenchay Activities Index) を分析しました。その結果、退院時の ADL の自立度が高いほど退院後の IADL 機能も良好であり、年齢、性別、リハビリ日数などが有意な関連因子として示されました。

研究背景: 急性期病院でのリハビリテーションは、身体機能の維持や廃用症候群の予防を通じて、退院後の自立生活を支える重要な役割を担います。しかし、入院中の機能回復や人口統計学的要因が退院後の ADL および IADL に及ぼす影響については十分に解明されていません。本研究は、これらの要因を明らかにすることで、より効果的な退院支援および在宅生活支援の方策を構築することを目的としています。

研究成果: 本研究では、急性期病院でリハビリテーションを受けた 309 名を対象に、退院後 1.5~2 年の IADL (Frenchay Activities Index) を評価し、退院時 ADL および人口学的要因との関連を検討しました。その結果、退院時の ADL が高いほど退院後の IADL も良好であり、性別、年齢、入院中のリハビリ日数が有意な関連因子として示されました。特に高齢者では IADL 低下のリスクが高く、退院後の自立支援には ADL 改善を重視した急性期リハビリテーションの最適化が重要であることが示されました。

社会への影響: 本研究は、急性期病院でリハビリテーションを受けた患者の退院後の自立生活に焦点を当て、ADL および IADL を規定する要因を明らかにしました。結果として、退院時の ADL 水準が高いほど退院後の IADL も良好であり、年齢や性別、入院中のリハビリ日数が重要な関連因子として示されました。これらの知見は、高齢患者の自立支援や地域包括ケアの質向上に資するものであり、急性期から在宅まで一貫したリハビリテーション戦略の構築に社会的意義を有します。

専門用語:

Activities of Daily Living (ADL : 日常生活動作) : 食事、更衣、移動、排泄など、日常生活を自立して営むための基本的な動作を指します。リハビリテーション医学では身体機能や介助量の評価指標として広く用いられ、患者の機能的自立度を示す中心的概念です。

Instrumental Activities of Daily Living (IADL : 手段的日常生活動作) : 電話の使用、買い物、料理、洗濯、金銭管理など、社会生活を維持するうえでより高次の活動を指します。IADL は退院後の地域生活能力や社会的自立度を評価する上で重要な指標とされています。

Barthel Index : ADL の自立度を定量的に評価する国際的に標準化された評価尺度で、10 項目 (食事、移乗、整容など) を 0~100 点で採点します。得点が高いほど身体的自立度が高いことを示します。

Frenchay Activities Index : 退院後の IADL を評価するための尺度で、15 項目から構成され、日常・社会的活動の頻度を 0~45 点で数値化します。高齢者の社会的活動性を客観的に把握できる指標として国際的に用いられています。